

III

調查・視察・訪問 編

今年度はモンゴルにおけるじん肺や石綿関連疾患の現状と、それらが起因する環境等を併せて知るべく、国立労働疾病・労働環境センターやウランバートル市内の火力発電所等を訪問した。以下に、その概要をレポートする。

01 モンゴル保健省及びWHO事務所訪問

9月15日、まず、今回の日本側参加者全員で、本ワークショップの主催者の一つであるWHO Western Pacific Regionのモンゴル支部を訪問し、WHO RepresentativeのDr.Wiwat Rojanapithayakorn氏と、同じくWHO Western Pacific RegionのDr. Oyuntogos女史、またモンゴル国側のもう一つの主催者であるMinistry of HealthのDeputy director, Dr.Dangaa Baigalmaa女史と面談した。

今回のワークショップは昨年度に引き続き2回目となり、前回は8月上旬(平成22年8月4日-5日)に2日間の開催であったが、今回については、モンゴル国からの強い希望により、モンゴル国医師のサマーバケーションが終了し、彼らが通常業務に戻った9月中旬に3日間とい

う日程で開催し、トップレベルの医師集団に受講してもらえるよう、調整した経緯がある。

モンゴル国側からは、9月中旬に開催することで、よりレベルの高い医師が受講することが可能となり、非常に高い波及効果を得られるだろうと謝辞があり、また、じん肺や石綿関連疾患などの健康被害については、WHOのWestern Pacific Regionが活発な活動をしているが、モンゴル政府もまだまだ対応が出来ていない分野であるので、毎年度ワークショップを開催してもらうことは、モンゴル国にとって大きな助けになり、また多いに期待していること、加えて今後も引き続き交流を希望しているなどの発言があった。



写真左から Dr.Oyuntogos、岸本岡山労災病院副院長、清水岡山労災病院院長、Dr.Wiwat Rojanapithayakorn、木村北海道中央労災病院院長、Dr.Dangaa Baigalmaa、高嶋労働者健康福祉機構医療事業部勤労者医療課研究班主査、藤本岡山労災病院第二呼吸器内科部長、大塚北海道中央労災病院第二内科部長

02 モンゴル外交・貿易省訪問

9月15日午後、モンゴル外交・貿易省を訪問し、アジア地区日本担当一等書記官のLuvsantseren Erdenedavaa氏と面会し、モンゴル国側の医療事情をうかがい、その上で本ワークショップ開催の経緯と目的などについて説明を行った。

Erdenedavaa氏によると、モンゴルの医療レベルは十分ではなく、裕福な人は外国に治療に行くので、モンゴルの医療レベルを上げるための、今回のようなワークショップは非常に有り難く、感謝しているとのことであった。

来年度以降のワークショップの継続については、モンゴルの保健省(本ワークショップの主催者の一つ)から、モンゴルの外交・貿易省に要望を出していただき、ぜひそれを日本の外務省などにも伝えたいとのことであった。



モンゴル外交・貿易省前にて、清水岡山労災病院長と岸本副院長。

03 モンゴル国立健康科学大学訪問

9月16日の朝、まず本ワークショップの共催者の1つであるモンゴル国立健康科学大学(HSUM)を訪問し、研究室などを数カ所ご案内いただいた。

大学内には学生と思われる若者(ただし大半は女性)が大勢おり、大学特有の活気溢れる様子が伝わってきた。



04 火力発電所における現地アスベスト使用調査

経済発展が著しいモンゴル国では、首都ウランバートルに国の全人口の約41%が集まっている(2010年現在。外務省HPより)。近年は遊牧民もウランバートル周辺に流入してきており、電力と熱の安定供給はモンゴル政

府の大きな関心事の1つとなっている(しかし、今なお日中に突然停電することもあり、滞在中も何度か停電に遭遇した)。

今回訪問したのは「第4火力発電所」で、ウランバー

トル市の西方10kmに位置し、モンゴル国最大の熱供給火力発電所として稼働している。1979年にソ連の有償援助によって建設が開始され、83年に運転が開始、以来ソ連の技術者が指導していたが91年にソ連が崩壊し、自由主義・市場経済に変わったため、ソ連の技術者たちが帰国してしまい、発電所の運営も不安定になったという。

そのような状況の中、日本国とJICAがメンテナンス用の工具と機材を無償で提供した。無償援助は98年までに3回に及んだという。さらに有償援助もなされ、現在は安定的に稼働し、モンゴル国中央地域の電力供給の70%、ウランバートルの熱消費の65%を担っているとのことであった。

なお、本火力発電所には、日本人労働者がJICA シニア海外ボランティアとして2年契約単位で働いているとのこと。当該発電所では90年代から日本人労働者が働いており、現在3名の日本人労働者がいるとのことであった。



火力発電所の2基の冷却タワー



火力発電所の方から第4火力発電所についての概要説明を受ける。



工場入口のすぐ頭上にアスベストが使用されていた。



場内は雑然とした印象。



発電所の内部を見学したが、目に見てそれとはつきりわかるアスベストが至る所で使用されていた。また、古くなって破損した石綿断熱材が放置されているのみならず、これから使用されると思われる袋詰めしたアスベストが工場内の至る所に放置されている状態であった。



場内は整理整頓があまり行き届いていない印象で、所々に無造作に廃棄物(古くなって破損した石綿断熱材等)と思われる物が積み上げられていたため、暗い中を足下に注意して歩く必要があった。



この環境の中、マスク無しで作業する若い作業員。



頭上のパイプ(アスベスト剥離部分)。



本火力発電所の発電には石炭を使用しており、すぐ左上の写真はボイラー、右上の写真はボイラーに石炭を運び入れるコンベアーである。なお、ボイラー内部は粉じんが舞っており、作業員はマスクをしていたものの、着用しているマスクは真っ黒の状態であった。



出口周辺には、中国製と思われるアスベストの袋が無造作に山積みになっていた。なお、発電所を訪問した時は、アスベストの袋が置いてある出口付近は風上であったため、アスベストが工場内に舞っていた可能性は否めない。きちんと管理されているとは言い難い状態であった。



旧ソ連の資本が入っていたことをうかがわせる入口にて。



05 国立労災疾病・労働環境センター訪問

まず、センター長のDr. Atarmaa女史よりモンゴルの職業性疾病の現状に関する話を伺った。それによると、モンゴルでの最大の職業性疾病は炭鉱や鉱山におけるじん肺であり、じん肺で補償の対象となる患者の発症年齢は大半が40歳から50歳代とのことであった。

わが国では最大の職業性疾病は20年以上も前から災害・事故となっており、またじん肺で労災となる患者の年齢は高齢化しているが、モンゴルのじん肺患者は、昭和30年代から40年代頃の日本





奥のデスクに座っているのが今回のワークショップ開催のキーパーソンの一人である、国立労災疾病・労働環境センター General DirectorのDr.Atarmaa Dashdorj 女史。



のそれに相当しているものと思われる。

また、センター内で使用している機材を見せていただいたが、全体的に老朽化が目立った。

特にアナログ式の胸部X線写真撮影装置は老朽化が顕著であり、研修を通して医師の画像診断レベルの向上を期待することは出来ても、このような装置を用いて撮影している限り、正しい診断をすることは到底不可能ではないかとの印象を受けた。

06

調査・視察等から見たモンゴルにおけるじん肺や石綿関連疾患の現状

今回初めて行った調査・視察等からは、今後のモンゴル国におけるじん肺や石綿関連疾患発症が懸念され、我々の果たすべき役割の重要性を再認識する結果となった。

国立労災疾病・労働環境センターでは、センター長のDr. Atarmaa女史よりモンゴルの職業性疾病の現状に関する話を伺い、併せて同センターの見学をした。Dr. Atarmaa女史のによると、モンゴルでの最大の職業性疾病は、やはり炭鉱や鉱山におけるじん肺であるとのことである。しかし、先述のように同センターで使用している機材は全体的に老朽化が目立ち、特にアナログ式の胸部X線写真撮影装置は老朽化が顕著であった。ワークショップを通しての医師の画像診断レベル向上の可能性とは裏腹に、ハード面の整備・充実を図らない限り、質の高い診断をすることは困難ではないかと思われた。今回のワークショップでも、モンゴル医師よりじん肺に合併した肺がん例の、胸部X線・CT写真を見せていただいたが、肺がんは認められたがじん肺の所見は確認されなかった。まだまだ限られた範囲からではあるものの、このような実態があることから判断すると、同

センターで紹介されたじん肺やアスベストに関連する疫学成績についても、これら疾患そのものが正しく診断されていない可能性も否定できない。我々のワークショップを通して、同国のじん肺と石綿関連疾患の診断、治療レベル向上に少しでも貢献できればと改めて考えるところである。

また、火力発電所の訪問では、話には聞いていたものの、至る所でアスベストが使用されているばかりか、古くなって破損したアスベスト断熱材が放置されており、加えてこれから使用されるはずである袋詰めされたアスベストが工場内のいたるところに放置されている状況であった。

モンゴルでは、冬期には各家庭で発電所からスチームの供給を受けているが、その配管や、また防寒用の窓の日張りに、アスベストを日常的に使用しており、このことから石綿関連疾患が今後広い範囲で発生することが懸念される。予防及び治療面における我々の知見を、さらに深くかつ継続的に同国に提供していく必要が感じられた。